

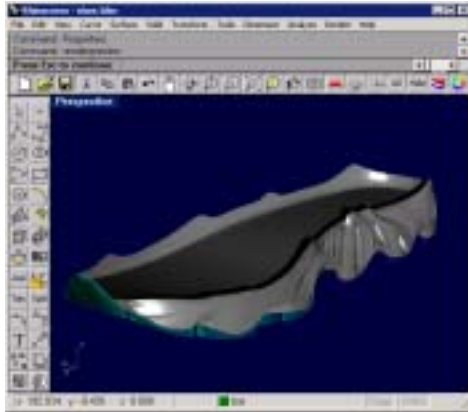
Solid Edge のための
高度なサーフェス（曲面）モデリング

Rhinoceros®
NURBS modeling for Windows

高度なサーフェスモデリング

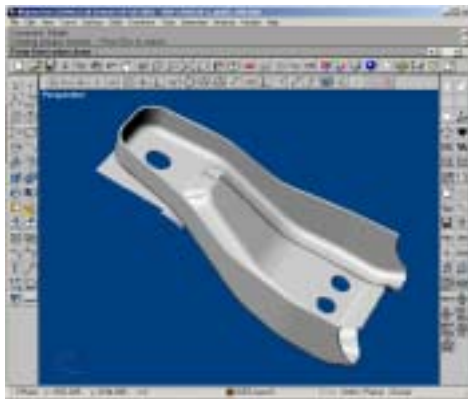
Rhino を使うと、Solid Edge のモデリング機能を、いろいろな形で高めることができます。Rhino を使って行えることは、次の通りです。

- 高度な自由形状サーフェスの作成および分析



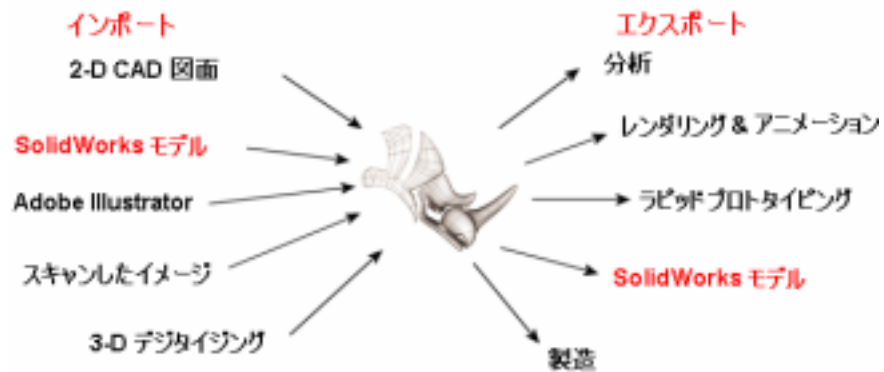
自由形状サーフェス

- IGES ファイルの修正



トリムに問題のある IGES ファイル

- アプリケーション間での 3-D データの変換
- いろいろな供給元からの 3-D データの編集



高度な自由形状サーフェスの作成

Rhino を使うと、非常に正確な自由形状サーフェスやソリッドモデルを作成し、それらを Solid Edge でインポート（読み込む）することができます。これらのモデルは、更新ができる関連性（リンク）のあるボディフィーチャとして、作図補助要素として、またはソリッドの置き換え面として使うことができます。

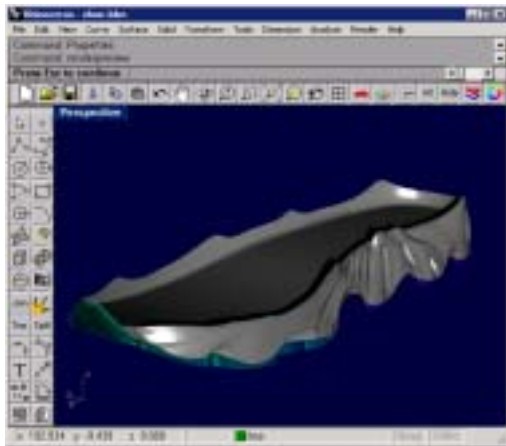
Rhino でのモデリングは、Solid Edge や他のパラメトリックフィーチャベースのモデラーでのモデリングとは異なります。Solid Edge では、スケッチまたはボディフィーチャからモデリングを始め、フィーチャを加えていくことで、コマンド履歴のツリーを作ります。Rhino は、これとは異なり、コマンド履歴のツリーを持たず、また、パラメトリックフィーチャも持ちません。このことによって、コマンド履歴や埋め込まれたスケッチに捕らわれず、ソリッドや曲線、そして高度なサーフェスを直接操作することができます。曲線は、サーフェスを作成するのに使用することができます。サーフェスは、作成、トリム、マッチ、評価、そして必要なら、結合して開いたまたは閉じたポリサーフェスにすることができます。Rhino は、開いた、そして閉じたポリサーフェスの両方を操作できる、ブール演算をサポートしています。

閉じたポリサーフェスは体積を定義し、IGES、STEP、または Parasolid ファイルとしてエクスポートでき、ボディフィーチャとして Solid Edge でインポートすることができます。

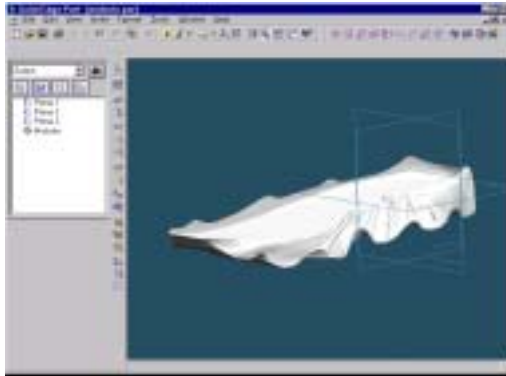
サーフェスと開いたポリサーフェスもインポートすることができ、厚みを付けてボディフィーチャにしたり、ソリッドの置き換え面として使用することができます。Rhino のサーフェスを Parasolid ファイルとしてエクスポートすると、関連性（リンク）が作成され、続いて行う Rhino でのサーフェス編集は、コマンド履歴構造を失うことなく Solid Edge へ送られ更新されます。

クロストレーニングシューズのミッドソール

このクロストレーニングシューズのミッドソールは、Rhino でモデリングしました。サーフェスを結合してできあがった、閉じたポリサーフェスを X_T (.sat) ファイル形式でソリッドとしてエクスポートし、Solid Edge でボディフィーチャとして開きました。



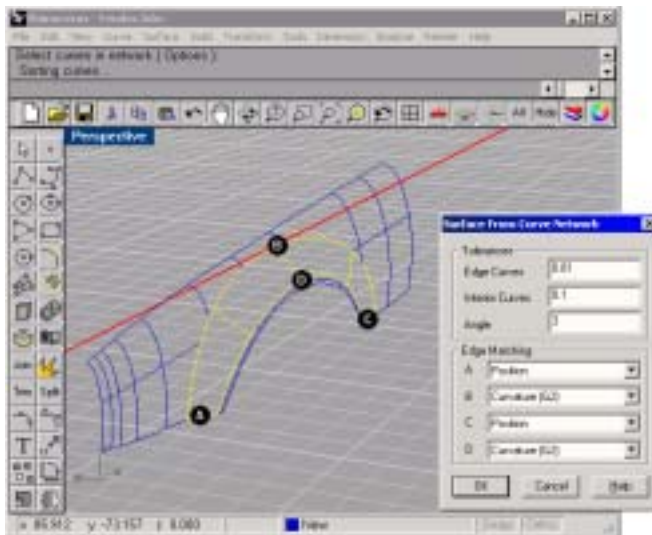
Rhino でのミッドソール



Solid Edge でのミッドソール

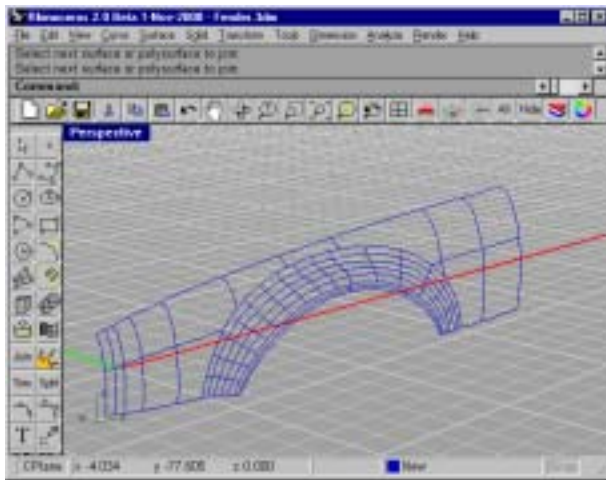
自動車のフェンダー

次の自動車のフェンダーは、Rhino でデザイン、構築しました。この例では、フェンダーの本体と、リップを 2 つの間にある特別なサーフェスで結合しています。このサーフェスは、繋ぎ目が反射に表示されないように、隣り合うサーフェスと曲率の (G2) 連続性を持っている必要があります。Rhino は、次の例にあるように、位置、接線、そして曲率合わせを含むハイエンドで機能豊富な、モデリングツールを特徴としています。



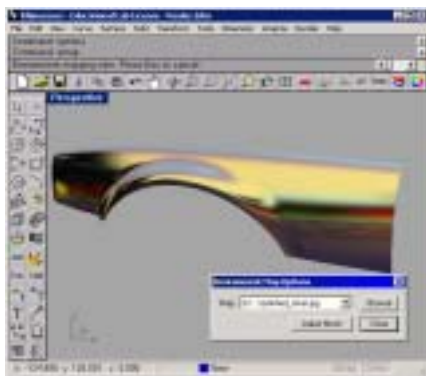
曲線の集まりから作成されたサーフェス

この例では、NetworkSrf コマンドを使用しました。隣り合うサーフェスのエッジと、前もって描いていた輪郭曲線をコマンドのインプットとして選択しました。輪郭曲線は、コマンドに望ましいサーフェス形状を指示します。B と D の印のついたサーフェスは、曲率 (G2) 一致に設定されています。G2 曲率は、サーフェス曲線の二次導関数がこれらのエッジで等しいことを示します。このことによって、フェンダーの反射に繋ぎ目が表れないことが確実にになります。

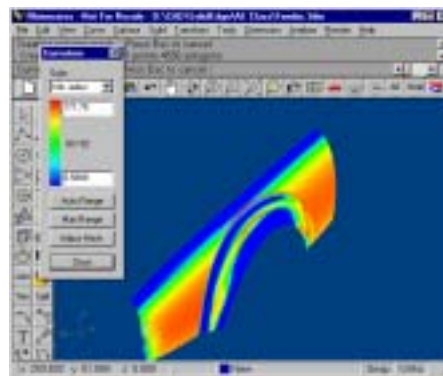


できあがったサーフェス

Rhino には、サーフェスの質を分析するツールがいくつかありますが、そのうちの数個を次に挙げています。反射に中断部分がなく、1つのサーフェスから次のサーフェスへ滑らかに移り変わる様子に注目してください。これは G2 曲率連続を示しています。



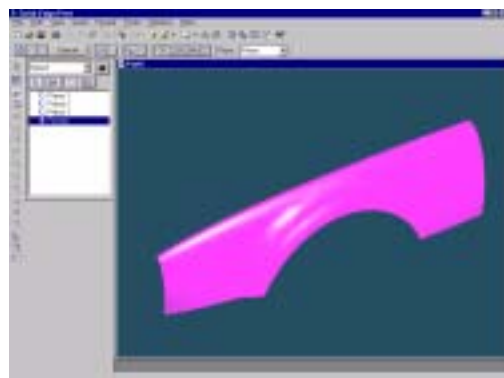
サーフェス分析に使われた環境マッピング



曲率分析がサーフェスの曲率値を色で表示しています。



ゼブラ分析がサーフェスの連続性を表示しています。



補助曲面として Solid Edge にインポート

IGES ファイルの修正

Rhino のファイル変換機能を生かした強力な使い方のひとつに、不完全に書かれた IGES ファイルをきれいに仕上げる機能があります。クライアント（得意先）やサプライヤー（下請け業者、仕入先、納入業者）から、Solid Edge でうまく読み込めない IGES ファイルを受け取けとられた経験がある方も多いでしょう。これは多くの場合、不適切にフォーマットされた IGES ファイル、足りないまたは二重になっているサーフェス、隙間または重複、または悪いサーフェストリミング情報があるのが原因です。Rhino は、これらの問題すべてに打ち勝つ基本的なツールを備えています。問題の数や IGES ファイルのサイズによっては、これは大変時間のかかる作業になる場合もあります。

Rhino では、IGES データがひとつの閉じたソリッドである必要はありません。そのため、Rhino は壊れたオブジェクトを飛ばして、しかしすべての点、曲線、そしてサーフェスデータを読みながら、モデルからの有効な情報をできるだけ読み込みます。Rhino は、多くの場合ファイルを読み、問題を自動的に修復します。その後の作業としては、それを IGES または X_T として保存し、Solid Edge で読み込むことだけです。修復が自動に行われない場合は、足りないサーフェスを補い、問題のあるトリムを修復し、サーフェスの不連続性を修正して、Solid Edge にソリッドモデルをエクスポートすることができます。一般的に、IGES ファイルの中にあるほとんどのデータは、きれいに修復することができます。時によっては、問題が非常に大きく、再モデリングが一番良い方法である場合もあります。このような場合でも、Rhino は元のデザインの目的を維持しながら、再モデリングする際に使用できるアイソパラム、セクション、そしてエッジ曲線を得るツールを備えています。

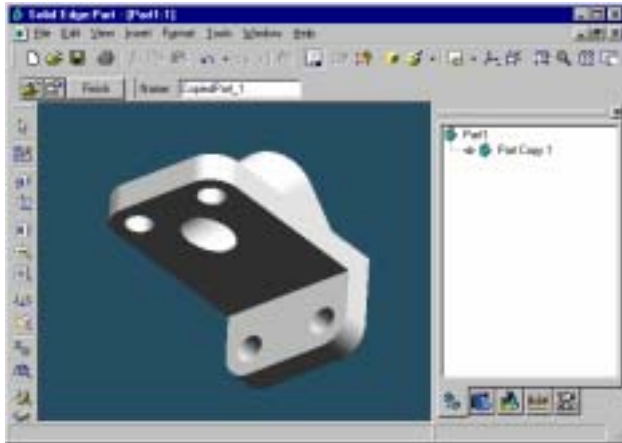
次の例のモデルは、IGES ファイルへのエクスポート時に大きな円柱が適切にトリムされなかったため、Solid Edge にインポートできません。



適切にトリムされなかった IGES ファイル

Rhino で、データを失うことなくファイルを読み込むことができましたが、トリムが自動的に修正されませんでした。

Rhino で、円柱をトリムし、他のパーツに結合しました。X_T ファイルとしてパーツをエクスポートした後、Solid Edge で読み込みます。



修正され、Solid Edge で問題なくソリッドとして読み込まれたパーツ

一般的な方法

IGES ファイルを修復する一般的な方法は、それぞれのファイルによって大きく異なります。何回も操作をするうちに、それぞれのアプリケーションからの問題のパターンが分かってくるでしょう。

きれいなファイルで開始する

古い格言で、“An ounce of prevention is worth a pound of cure. (1 オンスの予防は、1 ポンドの治療に値する。)”とされていますが、IGES ファイルの転送にも同じことが言えます。可能なら、エクスポートをする前にアプリケーションで少しの時間を費やしてファイルを「きれいに」すれば、後のクリーンアップ作業にかかる時間を大幅に節約することができます。ただし、これがいつも役に立つと言うとそうではありません。IGES データを作り出す 2 つの一般的なアプリケーションは、CATIA と Pro/Engineer です。次の手順と設定は、これらのアプリケーションから IGES データをインポートする際に起こる問題を最小に抑えます。

CATIA

CATIA からは、主にトリム曲線を改善してモデルを準備し、エクスポートしてください。これから紹介する手順は、Rhino をお使い頂いているある会社が、ダウンストリームでのクリーンアップ作業を最小限に抑えるために CATIA で行っていることです。

- 1 変換するモデルを用意するには、volume を使います：
SOLID + EXTRACT + VOLUME
- 2 ソリッドのモデルとすべての関係のないジオメトリをクリーンアップします：
KEEP + SELECT + GEOMETRY + ELEMENT の後、“VOLUME”を選択します。
- 3 境界曲線を再計算します：
古い境界を NO-SHOW から、SHOW に移動させます。
ERASE + NOSHOW // YES:SWAP。 *SPC - *SUR をキーインし、YES:SWAP をして戻ります。
- 4 ERASE し、*SPC - *VOL をキーインします。
- 5 CURVE1 + BOUNDARY し、*FAC をキーインします。
- 6 Run /CLN をして、エラーをチェックします。
モデルを転送する準備が整いました。

Pro/Engineer

Pro/E ファイルの Rhino へのエクスポートを最適化するには:

- 1 Pro/E の "config.pro" ファイルのこれらの設定を使用するか、これらを "rhino.pro" ファイルとして保存し、エクスポートする前に読み込んでください。


```
IGES_OUT_ALL_SRFS_AS 128
IGES_OUT_SPL_CRVS_AS_126 YES
IGES_OUT_SPL_SRFS_AS_128 YES
IGES_OUT_TRIM_XYZ YES
IGES_OUT_MIL_D_28000 NO
IGES_OUT_TRM_SRFS_AS_143 NO
IGES_OUT_TRIM_CURVE_DEVIATION DEFAULT
INTF_OUT_BLANKED_ENTITIES NO
INTF3D_OUT_EXTEND_SURFACE YES
INTF3D_OUT_FORCE_SURF_NORMALS YES
IGES_IN_106_F2_AS_SPLINE NO
IGES_IN_DWG_LINE_FONT YES
IGES_IN_DWG_PNT_ENT YES
IGES_IN_DWG_COLOR YES
FIX_BOUNDARIES_ON_IMPORT YES
```
- 2 余分なデータを非表示 (**Hide**) にするか、削除します。
SelDup コマンドを使って、二重になっている図形を見つけ、余分なものを「二重 (duplicate) レイヤ」に移すか、削除します。余分な図形が後で必要になる場合があります。
- 3 曲線や点を非表示 (**Hide**) にします。
SelSrf を使ってすべてのサーフェスを選択し、選択を反転 (**Invert**) して、それらを他のレイヤに移動します。画面にサーフェスだけが残ります。
- 4 問題があるサーフェスがあるかどうかを確認します。
Check と **SelBadObjects** コマンドを使うと、モデルの中のサーフェスのデータ構造に問題があるかどうかを知ることができます。問題のあるサーフェスは、後で修復できるように「問題のあるサーフェス (bad surface)」レイヤに移動します。
- 5 シェーディング (**Shade**) し、モデルを見て次のことを確認します。
 期待した通りに見えますか？明かに足りないサーフェスはありますか？サーフェスが、本来あるべきのところを超えてその先に延びていませんか？これらを修正するのに必要なトリム曲線は、「二重 (duplicate) レイヤ」に保存されている可能性があります。
- 6 ファイルのプロパティの絶対モデリング許容差を確認します。
 許容差は適切ですか？自由形状のサーフェスモデリングでは、モデリングの許容差に、考えて適切な値を設定することが要求されます。NURBS 曲線は、セグメント間の連続性情報を持つノットでつながれた、多項式表現セグメントの鎖のようなものです。これらのセグメントは、指定されたモデリング許容差内で隣り合う曲線にフィットされます。許容差の設定が非常に小さくなると、これらの曲線は複雑になり、システムのパフォーマンスに影響するようになります。お使いのダウンストリームの製造過程によってサポートされていない許容差値に収まるような高い密度の曲線を計算をしても意味がありません。
- 7 サーフェスを結合 (**Join**) します。

結合の際、エッジが指定されたモデリング許容差に収まる場合は、それらに結合されたことを意味する印が付けられます。許容差外にある場合は、それらは結合されません。結合作業によってジオメトリが変更されることはありません。この作業は、エッジを一致するものとして充分扱えるという印をそれらに付けるだけです。コマンドラインの結果を見てください。思った通りの数のポリサーフェスを得ることができましたか？時として、IGES ファイルをインポートすると、同じサーフェスが二重になっていることがあります。通常、そのうちの1つには問題がなく、もう1つは内側のトリムがない状態になります。**Join**を行う際は、2つのサーフェスのうちコマンドがどちらを選択するのかをコントロールすることはできません。これをテストするには、2つのオープン (naked) エッジを結合してみてください。近くのあるべき場所にオープンエッジがない場合、結合を元に戻し (**Undo**)、二重になっているサーフェスのうち、より不完全な方のサーフェスを削除し、**Join** をもう一度行ってみてください。

8 オープンエッジをチェックします。

オープンエッジとは、何とも接続されていないサーフェスエッジです。結合の処理中、それらは指定されたモデリング許容差よりもより離れていたのです。これは最初のモデリングが雑に行われたため、インポートされた IGES ファイルの許容差の設定が誤ってされたため、または二重になっているサーフェスが原因の場合があります。**ShowNakedEdges** コマンドを実行した時に、多くのオープンエッジが表示された場合は、結合を元に戻し、絶対許容差を緩めることを考えてください。元のモデリングはより緩い許容差で行われたのに、エクスポートの際の設定がよりきつかった可能性があります。

メモ: かなり再モデリングしないと、サーフェス間の許容差適合は改善できません。

9 オープンエッジを結合するか、再モデリングします。

オープンエッジの結合は、後に良い結果を生み出すこともあり、そうでない場合もあります。それゆえに、ダウストリームで問題を引き起こす場合もあります。エッジを結合する理由が、ソリッドとして Solid Edge に後でインポートするためか、STL ファイルを作るなどのメッシュ操作のためなら、**JoinEdge** コマンドを使用することは一般的に問題は引き起こしません。後でセクションを切る場合なら、許容差外で結合されたエッジを交差するので、セクションには隙間ができます。埋められる隙間は、結合の前に表示されます。隙間が許容差設定の2倍以下なら、心配しないで作業を続けてください。隙間が大き過ぎる場合は、サーフェスを編集するか再構築して隙間を狭くすることを考えてください。**Join** および **JoinEdge** は、サーフェスジオメトリに変更は加えません。これらのコマンドは、指定されたまたは優先される許容差内でエッジを一致することができる場合に、それらに印を付けるだけです。

10 問題のあるサーフェスを修復します。

問題のあるサーフェスを一度に1つ修正し、それらをポリサーフェスに次々に結合してまとめる (**Join**) のが一番良い方法です。**Check** をパスしない原因になっている問題を修正できる方法を、一番無難な方法から、最も思いきった方法まで、次に順番に挙げていきましょう。

- エッジを再構築する
- トリム曲線を分離し、再トリムする
- サーフェスを再構築する
- サーフェスを構築する – 周辺のサーフェスからエッジを取り出し、問題のあるサーフェスを通してセクションを切り、集めた曲線から置き換えるサーフェスを構築する

サーフェスから、**tedge** (トリムエッジ) が G1 でないというメッセージが表示され、**Check** をパスしない場合、この (あまり重要でない) エラーは無視して構いません。気になる場合は、複数のスパンサーフェスをノット上で分けるとよいでしょう。

11 問題のあるオブジェクトをチェックします。

Check をパスしたサーフェスの結合が、結果として **Check** をパスしないポリサーフェスになることが時々あります。これは一般的に、モデリング許容差より短いトリム曲線またはエッジの非常に小さいセグメントによって引き起こされます。隣接するサーフェスを取り、それらをチェックし、境界の曲線を編集して、これらの小さいセグメントを取り除き、それらを再度結合してまとめます。Check をパスするオープンエッジのない閉じたポリサーフェスができたら終わりです。サーフェスを結合、修正中は、**Check** を時々実行するとよいでしょう。

12 エクスポート

IGES ファイルが修復され、きれいになったので、それを IGES、Parasolid、または STEP としてエクスポートし、Solid Edge でインポートすることができます。Parasolid は、ファイルをクリックするには望ましい形式ですが、他のファイル形式が便利な場合もあります。Parasolid の「世界」は、 $10 \times e6$ の精度で、0,0,0 を中心とし、3つの軸方向に 1000メートルに伸びる領域として定義されます。すべての Parasolid の計算は、メートルに変換され、この「世界」の中に収まらなければなりません。モデルが空間に置かれ、この境界枠を超える大きさに設定されている場合は、変換の際に生じる問題を避けるために、それを原点に近づける必要があります。

アプリケーション間で 3-D データを変換する

Rhino は、強力なファイル変換ツールとして使用することもできます。Rhino を使うと、レンダリング、アニメーション、製図、エンジニアリング、分析、そして製造用アプリケーションと、正確に 3-D モデルを共有することができます。

サポートされているファイル形式は次の通りです。

DWG/DXF (AutoCAD 2000、14、13、および 12)、SAT (ACIS)、X_T (Parasolid)、3DS、LWO、STL、OBJ、AI、RIB、POV、UDO、VRML、BMP、TGA、JPG、CSV (エクスポートプロパティおよび流体静力学計算データ)

IGES (Alias、Ashlar Vellum、AutoFORM、AutoShip、Breault、CADCEUS、CAMSoft、CATIA、Cosmos、Delcam、FastSurf、FastSHIP、Integrity Ware、IronCAD、LUSAS、Maya、MAX 3.0、Mastercam、ME30、Mechanical Desktop、Microstation、NuGraf、OptiCAD、Pro/E、SDRC I-DEAS、Softimage、Solid Edge、SolidWorks、SUM 4、SURFCAM、TeKSoft、Unigraphics)

一般的に使われるファイル形式のほとんどがここに挙げられていますが、新しいファイル形式も必要に応じて Rhino に追加していきます。

これらのファイル形式を使用して、ほとんどどのような供給元からのスケッチ、図面、または 3-D モデルでも、Solid Edge で既にモデリングした部品を含むモデルのベースとして使うことができます。

Solid Edge のジオメトリを Rhino を使って修正する

Rhino を Solid Edge と一緒に使うと、Rhino で複雑なサーフェスを作成し、それを Solid Edge でボディの面を置き代えるのに使用することができます。Parasolid ファイルを Rhino からのファイルとして使用した場合、関連性が作成され、パーツ面が Parasolid ファイルにリンクされません。サーフェスに変更を加えると、その変更はコマンド履歴リストを変えずに Solid Edge に反映されます。

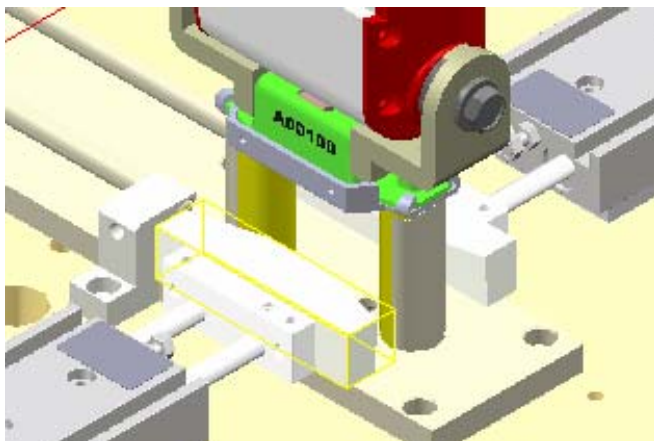
一般的な操作手順は、次の通りです。

1. 基準となるパーツを Solid Edge からエクスポートします。
2. 基準となるパーツを使って、Rhino で自由形状サーフェスをモデリングします。
3. Rhino からパーツを Parasolid ファイルとしてエクスポートします。
4. パーツを Solid Edge にリンクします。

5. Rhino でパーツを編集し、リンク Parasolid ファイルへ再エクスポートします。

Rhino には、デザインプロセスを助けるサーフェスツールの完全な一式が備わっています。次の例では、Rhino を使ったエクスポート、サーフェス作成、点編集、テキストのエンボス、そして Parasolid サーフェスを使った Solid Edge と Rhino 間の関連性（リンク）について紹介します。

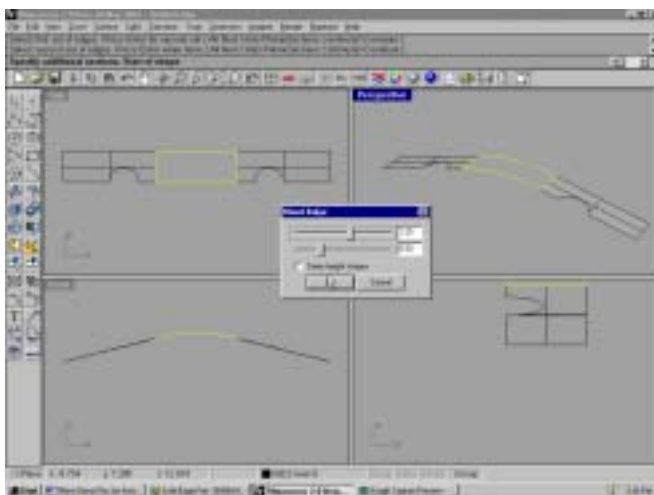
Solid Edge で:



黄色で縁取られているパーツをエクスポートし、Rhino で開いて編集します。サイズ、位置、そして向きの情報は維持されます。

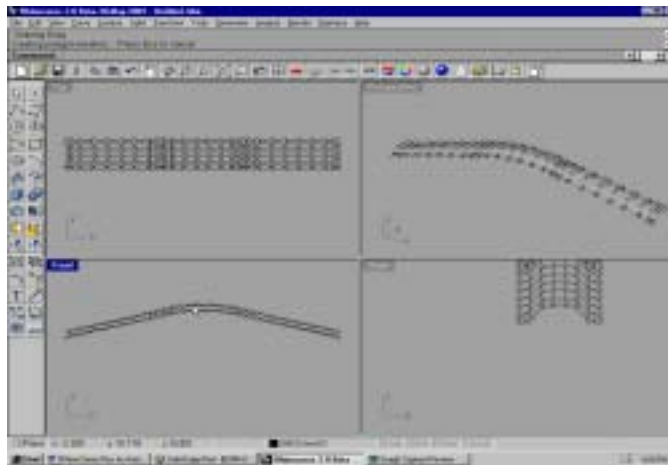
Rhino で:

まず、開始サーフェスを他のジオメトリから分離します。そして、2サーフェス間にブレンドサーフェスを作成します。



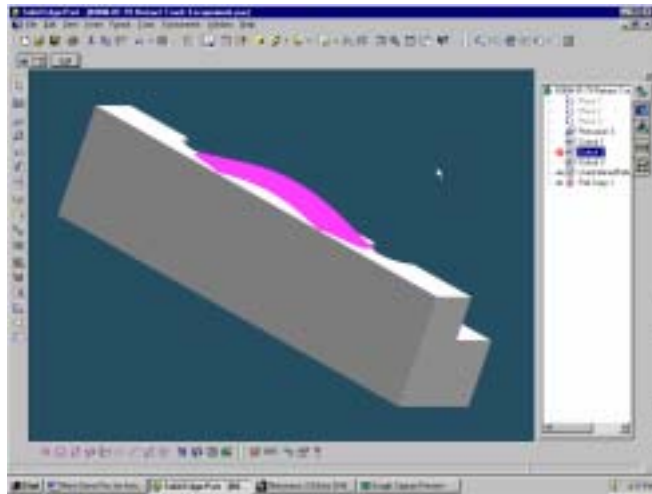


3つのサーフェスを1つのサーフェスに**マージ**し、トリム曲線を分離します。次に新しい単一サーフェスを**再構築**して、編集に使用する制御点の数を増やします。この例では、中央の4行の制御点を1.5mm上に移動して、中央部分を引き上げます。
次に、新しいサーフェスを **Parasolid** ファイルとして**エクスポート**します。

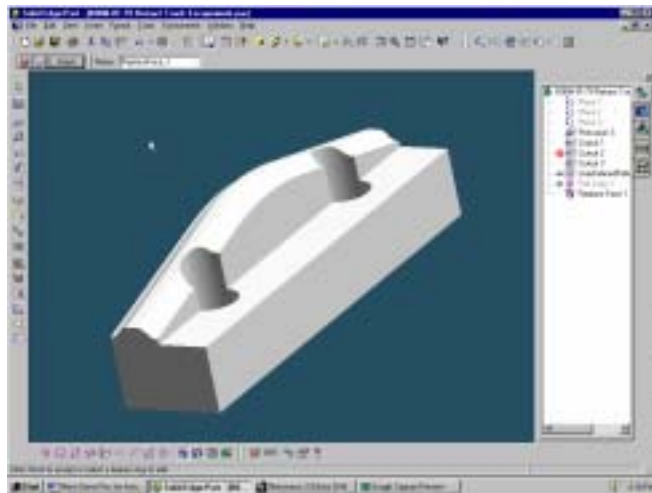


Solid Edge で:

Parasolid ファイルを Solid Edge で**パーツコピー**として開きます。

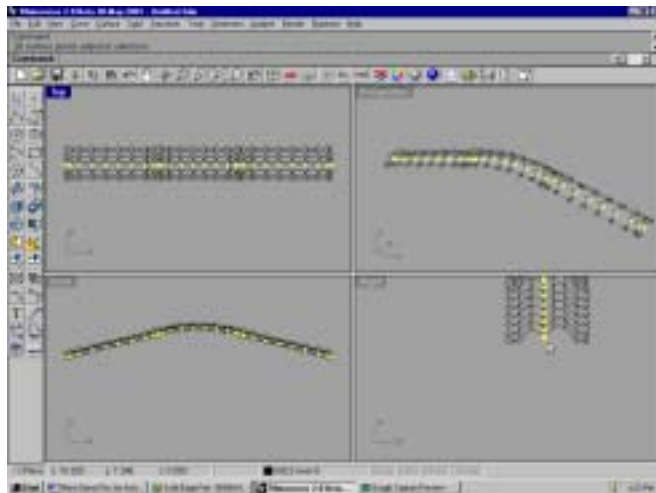


パーツコピーをソリッドボディの面を**置き換える**のに使用します。

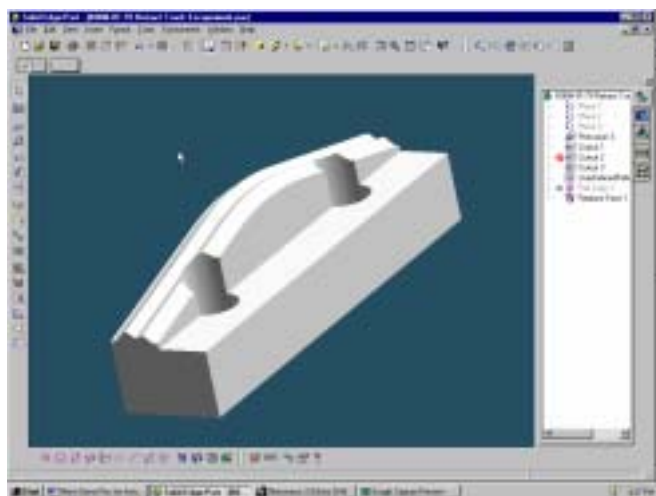


Rhino で:

次に、中央の 2 行の制御点を 1.5mm 下に移動してサーフェスを編集します。編集したサーフェスを、前と同じ名前と位置で、再び Parasolid ファイルとしてエクスポートします。

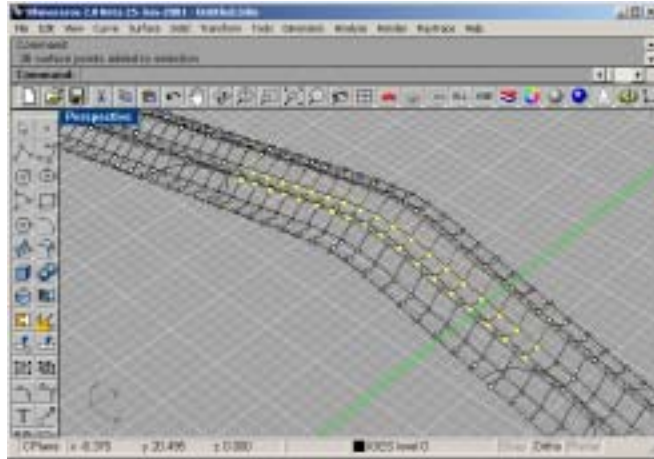
**Solid Edge で:**

Solid Edge ですべてのリンクを**更新**すると、置き換えたサーフェスの変更内容が認識されます。Rhino で加えた編集が、サーフェスを更新することによって画面に表示される様子を見てください。

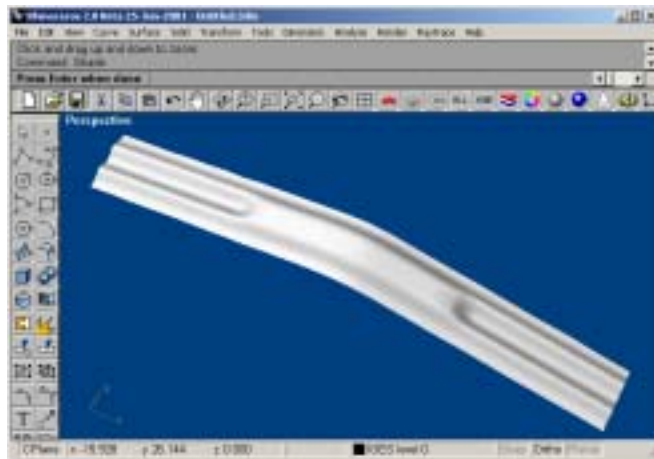


Rhino で:

次に、テキスト情報を配置するためにサーフェスに平らな部分を作ります。ここでは、穴と穴の間で 2 行の点を選択します。



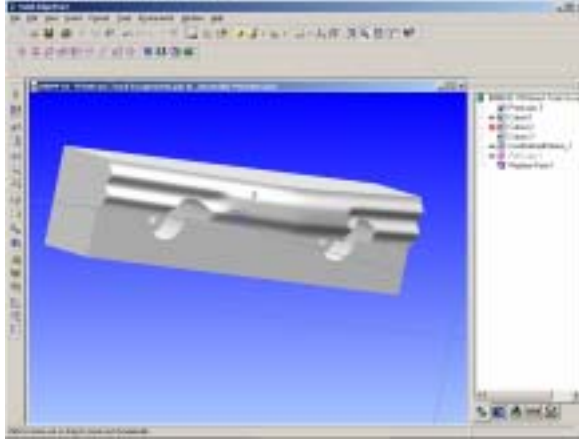
点を 1.5mm 上に移動し、サーフェスの中央部分を平らにし、制御点をオフにします。



編集を加えたサーフェスを Parasolid ファイルとしてエクスポートし、元のサーフェスを上書きします。

Solid Edge で:

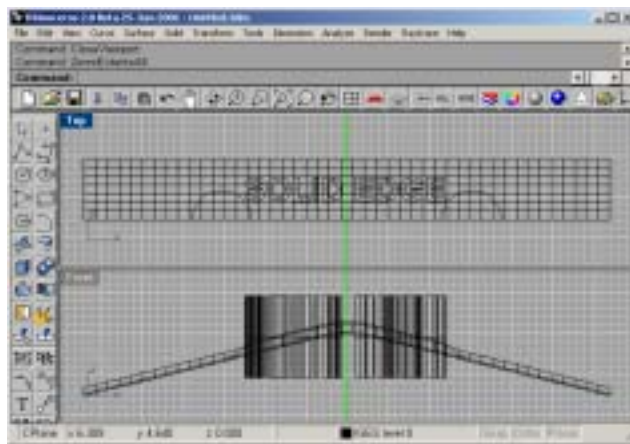
すべてのリンクを**更新**します。Rhino で加えた編集が、Solid Edge でサーフェスを更新することによって画面に表示される様子を見てください。

**Rhino で:**

Top ビューポートをアクティブにします。**TextObject** コマンドを使用し、ソリッドテキストオブジェクトを作成します。Rhino では、TrueType フォントを使って、曲線、サーフェス、ソリッドを作成することができます。次の設定を使用してください。



ソリッドテキスト文字をドラッグし、サーフェスを通り抜け、穴と穴の間に収まるように配置します。

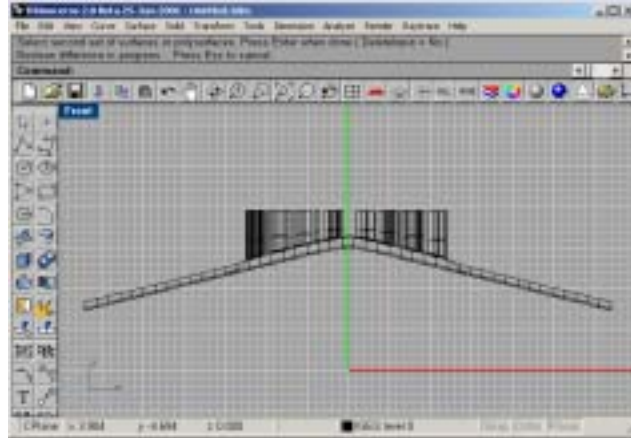


BooleanDifference (差) コマンドを使用し、テキスト文字の下の部分をサーフェスから引きます。

最初のオブジェクトのセットには、テキスト文字を選択します。

テキスト文字をすべて選択するには、交差窓を使用することができます。

2つ目のセットには、サーフェスを選択します。選択を終了する前に、**DeleteInput** を **No** に変更してください。



トリムされたテキストを使って、Solid Edge のサーフェスから切り取ります。

切り取る部分を 1 mm の深さにするために、Rhino でテキストを下に移動します。

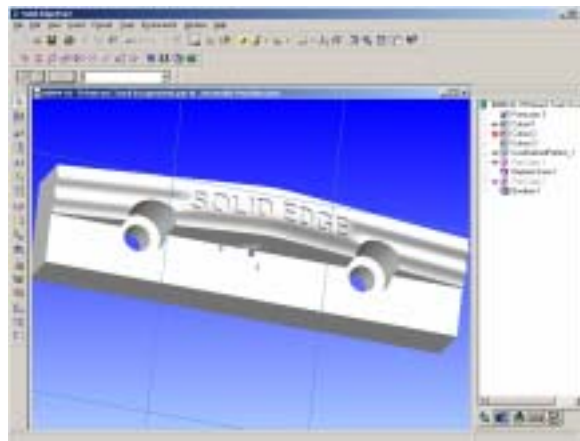
テキストを選択し、**1 mm** 下に**移動**します。

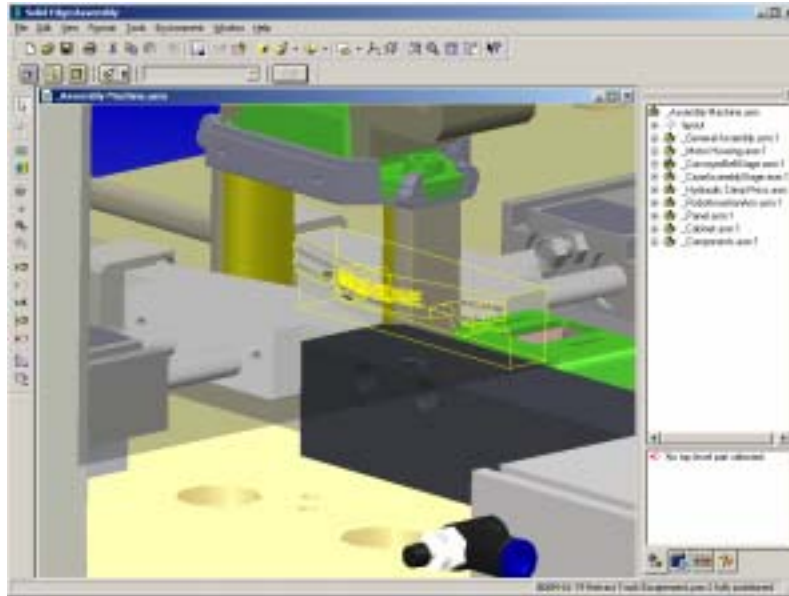
Export Selected を使用し、新しい名前を付けて Parasolid ファイルとして保存します。

Solid Edge で

Rhino で作成したばかりの Parasolid ファイルを使って、**パーツコピー**を挿入します。

パーツコピーをツールとして使用して**ブール演算の差**を実行し、「パーツコピー」を非表示にします。





メインアセンブリに戻され表示された編集されたパーツ (黄色で縁取り)

3-D デジタイザを使用してデータを収集する

Rhino は、Microscribe、そして Faro Space Arm デジタイザと直接接続してデータを収集したり、製品を逆行分析 (リバースエンジニアリング) するのに使用することができます。



MicroScribe および Faro Space Arm の 3-D デジタイザの直接サポート

Solid Edge のコンパニオンとしての Rhino

Rhino を IGES ファイルの修正のためのコンパニオンアプリケーションとして、ファイル変換ツールとして、非常に正確な複雑なサーフェスを作成するツールとして使い、また様々な供給元からのデータを使用することによって、Solid Edge の力を大幅に伸ばすことができます。この文書を読んで頂いて、自由形状の工業デザインを可能にすることで Rhino が Solid Edge の限界をどのようににより伸ばすのか、また Rhino を使うことで、難しいモデリングに直面した時にどのようにそれを解決していくのかを基本的に理解して頂けたことと思います。詳しい情報、および、フル機能評価版をダウンロードするには、www.rhino3d.co.jpを参照してください。